

# 国際人成島柳北の旅した明治日本

Matthew FRALEIGH

幕末期に奥儒者として勤め、そして徳川幕府の瓦解後に『朝野新聞』の社長として生まれ変わり、明治初期のジャーナリズムに深く貢献した成島柳北の代表的な作品に、「航西日乗」という紀行文がある。これは、維新後に自身のこれからの進路を未だ模索しつつあった柳北が明治5年から6年にかけて、現如上人をはじめ、松本白華、石川舜台、関信三という東本願寺関係者4人と共にヨーロッパを訪れたときの記録である。岩倉使節団もちょうど同じ時にパリにいたので、時々そのメンバーと合流して政府機関や文化施設を視察したが、柳北を含む東本願寺グループはむしろ、パリを中心に西欧の宗教の機関、西欧に於ける東洋学の現状を見て帰ってきた。その直後、柳北はパリで少し研究しはじめていたサンスクリットの知識を生かすべく、まず東本願寺の翻訳局の局長の職に就いた。しかし、その仕事に携わってから1年弱で、ヨーロッパで近代的な出版や印刷の技術を実際に見た経験を發揮でき、しかも自分の性質によりふさわしく、且つかねてからの願いが叶う仕事をする機会に恵まれた。すなわち明治7年に新聞の世界に身を投じることとなった。

柳北の新聞人としての活躍について考察する際、当然のことだが、彼が帰国後に『朝野新聞』の「雑報」もしくは「雑録」欄に発表したエッセーが最も重要な資料とされてきた。しかしこの論文では、視点を柳北の日本国内旅行の経験に基づいて執筆した紀行文に絞って考えたいと思う。明治5、6年に世界一周をした記録である「航西日乗」は約10年後に柳北の創刊した『花月新誌』上に掲載されたが、その外遊の前後に京都・岡山・四国・熱海・茨城などを訪れた経験が記録されている国内紀行文が、少なくとも19編確認できる。このほかに、東京近辺の名所、名園などを訪れた、もっと短いものもいくつかあるが、と

りあえずここではこの19編だけについて考察してみたい。柳北の15年間のさまざまな旅に基づいた紀行文を次の表にまとめてみたが、まず紀行文を発表する形と場がどのような影響をその文章形式と内容に及ぼしたかについて考えたいと思う。またこれらの作品を読むことによって、柳北の文筆活動に対する考え方の変化、ならびに日本国内の様子を見る視点の変遷に少し光を当てることができると思う。

旅行期間	題名	目的地	掲載
1869.10.12-11.28	航薇日記	岡山	花月新誌, 1879.09.28-1881.11.20 [36] 柳北全集, pp. 121-158
1870.03.20-03.30	常總遊記	茨城	柳北全集, pp. 286-290
1870.12.04-12.14	下館遊記	茨城	柳北全集, pp. 290-293
1872.09.12-1873.07.08	航西日乗	パリ・ロンドン等	花月新誌1881.11.30-1884.08.08 [27]
1877.03.08-04.28	客中漫録	京都	朝野新聞, 1877.03.18-04.24 [12] 柳北遺稿上, pp. 98-117
1878.09.02-09.12	澡泉紀遊	熱海	花月新誌, 1878.09.22から 熱海文載, pp. 1-28 柳北全集, pp. 158-169
1879.04.27-04.28	千葉土産	千葉	朝野新聞, 1879.05.02-05.03 [2] 柳北遺稿, pp. 117-120
1879.09.29-10.06	濱松風	浜松	朝野新聞, 1879.10.02-10.12 [8] 柳北全集, pp. 169-175 柳北遺稿上, pp. 121-132
1879.10.07-10.11	濯纓日記	箱根	朝野新聞, 1879.10.14-10.18 [4] 柳北全集, pp. 175-178 柳北遺稿上, pp. 132-138
1881.01.20-02.03	鴉のゆあみ	熱海	朝野新聞, 1881.01.25-02.09 [11] 熱海文載, pp. 29-50
1881.03.30-04.25	ねみだれ髪	京都	朝野新聞, 1881.04.07-05.08 [20] 柳北遺稿上, pp. 139-172 柳北全集, pp. 182-199
1881.09.05-09.15	あたまの洗濯	伊香保	朝野新聞, 1881.09.11-09.24 [10] 柳北遺稿上, pp. 172-191 柳北全集, pp. 199-208

1882.01.12-01.25	なくもがな	熱海	朝野新聞, 1882.01.18-02.04 [6] 熱海文叢, pp. 51-64
1882.05.22-05.23	二十四時間遊記	金澤	朝野新聞, 1882.06.01 柳北遺稿上, pp. 63-65
1882.08.09-08.24	筆のまにまに	箱根	朝野新聞, 1883.08.16-09.06 [10]
1883.01.23-02.09	烟草の吸さし	熱海	朝野新聞, 1883.01.26-02.15 [10] 熱海文叢, pp. 65-87
1883.08.25-09.07	すげのを笠	熱海	朝野新聞, 1883.08.30-09.14 [10+附言] 熱海文叢, pp. 88-115
1883.12.28-1884.02.15	藥槽餘滴	熱海	朝野新聞, 1884.01.08-02.24 [20] 熱海文叢, pp. 116-178
1884.06.22-07.07	四日の菖蒲	伊香保	朝野新聞, 1884.06.25-07.11 [10] 柳北遺稿上, pp. 191-208
1884.08.20-09.26	洗愁日乗	熱海	朝野新聞, 1884.08.26-10.01 [12] 柳北全集, pp. 208-220 柳北遺稿上, pp. 208-232

ご覧のように、その多くは『朝野新聞』或いは『花月新誌』で発表されている。「遊記」という言葉がつくタイトルもいくつかあるが、タイトルに明記されない紀行文でもその冒頭もしくはその結びに作品を「遊記」として位置づける言説も多く見られるので、これらをひとつの作品群として考えても差し支えなく、当時の読者もそういう風に読んだと思われる<sup>1)</sup>。

柳北の紀行文の特徴をいくつか指摘すると、まずほかの「雑録」欄所収のエッセイと違って、これらの作品の多くは割りと長い連載となっている。文章も概ね日記の形をとり、しかも原則として旅行期間中に毎日必ず何かの記述があるという連続的日付形式である。文体は、殆どの場合、漢字と片仮名だけを交えた漢文訓読体だが、その初期の作品には多少例外が見られる。柳北の紀行文のうち、最も古い旅を記録する「航薇日記」は、漢字と平仮名で書かれた和文体である。その次に古い「常總遊記」と「下館遊記」は、訓点がついている漢文体である。この19編の紀行文の多くには、旅行中に見た風景、訪れた名所、感じた旅情を詠んだ柳北自作の漢詩や和歌も鏤められているが、旅路で出会った

文人のことや彼らと一緒に詠んだ詩（特に和韻詩）もかなり載っている。そしてそのところどころに嘗ての旅行者の詩や歌を、手元にある書籍や当地の石碑に確認したり、或いは自ら思い起こしたりして、自分の紀行文に引用している<sup>2)</sup>。

このパターンは、柳北のどの紀行文にも一貫して見られるが、但し、「遊記」という名のついている二つの漢文体紀行文には、その後の紀行文と大きく違う点がひとつある。それは、記述の話題が和歌や歌枕であっても、行文が漢文体である以上、和歌自体は一切記されていないという点である。たとえば明治3年の春、「万葉集」にも西行の歌にも出てくる「古河の渡り」に着いた時の箇所では、柳北は遊記に「國詩所傳古河渡便是也」としか書かず、そこには歌の引用も創作もない<sup>3)</sup>。或いは同じ年の冬、幕末のころの旧友で維新後に下館藩知事になった石川総管みさかねを訪れた時の箇所では、柳北はその母親に大変感銘を覚え、「知事公邀余於北堂君之亭。北堂君亦慈順可敬之人。公之先考齡三十餘而卒。北堂君養公守寡而迨今日。其志操可稱嘆。性亦好國詩。使余書數箋。」と記したにもかかわらず、柳北の詠んだ和歌は見られない。<sup>4)</sup> この二つの漢文遊記は、いづろ最終形が完成したかは未詳だが、その直前に書かれた（あるいはもっと厳密に言えばその原型が書かれた）「航薇日記」には、それとは逆に和歌も漢詩も豊富に見られる。

このように現在、二つの「遊記」と「航薇日記」は大変対蹠的な形を取っているが、その隔たりを説明するのに少なくとも二つの仮説が想定できる。ひとつは、当初書かれてより10年後に発表されることになる「航薇日記」は、柳北の紀行文を始め、全作品においてもあまり例をみない文体で、つまり執筆当初から和文であったというものである。その翌年、二つの純粹漢文体の遊記を執筆した柳北は、先述したように、旅行中に詠んだ和歌を文中にさしはさむことを控えた。初期の国内紀行文にこうして、自分の旅を二つの異なる文体で書いてみた柳北は、この実験的な過程を経て、漢文体の系譜に属し、しかも詩も歌もさしはさむことのできる漢文訓読体という折衷案に落ち着いたということである。実は、柳北が『朝野新聞』に載せた初期のコラムにも同じ様に、さまざま

まな文体で表現してみた痕跡が辿れる。柳北が『朝野新聞』の雑話・雑録欄のために執筆したエッセイは、『柳北全集』や『柳北遺稿』というような後のアンソロジーを見ると、漢文訓読体のものが圧倒的に多いが、創立当初の『朝野新聞』を見てみると、明治7年から明治8年にかけては、柳北の執筆したエッセイに和文体のものも少なくない。『朝野新聞』の雑録欄の基本的な形ができるまでには、時間がかかったと言える。

しかし後述するように「航薇日記」は、内的証拠だけを考えても事後的に再編集されたことが明白であるから、もうひとつの可能性も考えられる。それは、「航薇日記」と二つの漢文遊記との違いは、「航薇日記」は随分後になって出版されたためになんかなり手が加えられ、再編集されたことによるというものである。自筆の原本が喪失している以上、確たる証拠はないが、いくつかの事実を考えると、初期紀行文のそれぞれの原型はかなり似ていたとも考えられる。柳北は一生漢文体の日記をつけ続けていた。現存する8巻は、全部共通した純粹漢文体をとっている。おそらく紀行文の元来の形は、そのような漢文体で、詩歌は別に（或いは欄外に）記されていたという可能性が高い。つまりそれは海外紀行文「航西日乗」に確認できる形と同じである。「航西日乗」は旅の10年後に訓読体で発表された。ところが、当時の同行者であった松本白華が旅行中こまめに写していた柳北のもともとの日記は漢文体で、折々に詠んだ漢詩はその欄外に書かれている。前田愛氏が指摘したように、この漢文体の日記は疑いもなく「航西日乗」の原型であり、柳北が後に連載する段階で原文の漢文を訓読体へ書き変えたことがわかる。<sup>5)</sup> 訓読体にしたのは、要するに『朝野新聞』や『花月新誌』の読者のために書くという新しい事情があったからであろう。また、齋藤希史氏が論じるように、中井櫻洲の訓読体海外紀行文『西洋紀行 航海新説』（明治3年）、あるいは『漫遊記程』（明治10年）からヒントを得て書き換えられた可能性もある。<sup>6)</sup>

いずれにしても柳北の発表した紀行文に和歌も漢詩も両方とも登場するようになるのは、明治10年の「客中漫録」あたりからで、その後は統一された漢文

訓読体をベースにした文体を取るようになる。「航薇日記」を除けば、柳北の紀行文を旅行期間の順番に並べてみると、外遊を境に文体の変化があったように見える。しかしそれは、今まで述べてきたように、その外遊経験のためではなく、むしろ『朝野新聞』で「雑録」の形が確保されたためである。

このように紀行文は発表する場に応じてその文体が変わったということが明らかになったが、一方、内容には変化が見られないだろうか。実は日本語の歌も許せる文体がいったん確立されると、柳北の紀行文に於ける詩歌は、更に多様な形を取り始め、漢詩と和歌だけではなく、俳句<sup>7)</sup>も狂歌<sup>8)</sup>も登場するようになる。そのほかにも、紀行文を新聞で発表することが執筆の前提となったことは、さまざまな変化をもたらしたと言える。

まずその紀行文に表れている時間観念に変化が見られ、同時性を強調するようになったことが分かる。明治10年「客中漫録」を執筆した時から、柳北は紀行文を旅先から連続的に『朝野新聞』に郵送するようになった。その結果、柳北の実際の旅の時間と、それが紀行文として出版される時間が限りなく近くなり、柳北がまだ旅先にいる間にも既に紀行文の最初の部分から新聞に連載されることになった。「客中漫録」以降の紀行文の多くはこの形をとった。なかでも、明治14年の「鴉のゆあみ」を例に取ると、この表が示すように、執筆日と掲載日との間には5日間か6日間ぐらいのずれしかなかったことがわかる。

	執筆日	掲載日
1	01.20	01.25
2	01.21	01.26
3	01.22	01.28
4	01.23	01.29
5	01.24-01.25	02.01
6	01.26	02.02
7	01.27-01.28	02.03
8	01.29	02.05
9	01.30-01.31	02.06
10	02.01-02.02	02.08

このような発表の仕方が可能になったのは郵便配達制度ができたためだが、紀行文の日付形式自体は、文中で語られている時間と、読まれる時間との間が縮まってきたことを強調することになった。またそのほかに、文中に同時性を強調

する箇所がでてくる。たとえば、同じ「鴉のゆあみ」を見ると、1月27日の項に「東京ヨリ飛報有り昨曉神田ニ火有り二州ニ延焼シ水ヲ渡リ本所深川ニ及ブ午後二時未ダ全ク熄マズト」とあるが、この事実をわざわざ紀行文に書き込むことは、東京の読者にとって、もはや情報価値は低く情報伝達の意義がないとはいえず、読者に柳北の紀行文を現在進行形風に読むように促したと思われる。

ベネディクト・アンダーソンの名著『想像の共同体』には、出版資本主義の発達により、新しい時間観念ができることが論じられている。つまり、新聞などの普及によって、領土に普遍的に染み渡っている同時性という近代国家の前提となる意識が構築されたということである。柳北の新聞に掲載した紀行文の中には、このような東京の出来事に言及するところが散見される。そこには、紀行文の読者に柳北と同じ時間を共有しているという意識を持たせる効果があった。

実際柳北は、初めて新聞に連載した紀行文「客中漫録」を執筆した時から、新聞の普及を開明、発展のレベルの指数として位置づけていた。明治10年、柳北が4年振りの京都で注目したことのひとつは、当時の新聞の普及であった。「唯ダ新聞紙ハ追々流行ス僕ノ四年前來リシ時ハ新聞紙屋ハ山師ノ部ニ類屬スルガ如ク思ヒシ者十ノ八九ナリシガ方今ハ餘程開ケタル狀況アリ是レ我々ノ爲メニ賀ス可キノミナラズ西京人ノ爲メニ賀ス可シ」<sup>9)</sup>とある。他の地方を訪れた時にも、新聞の有無に言及するところが多く見られる。たとえば明治11年の「澡泉紀遊」には、熱海周辺にある宮ノ下という町を訪れた際、「該地新聞紙縦覧所有リ、主人小林文志ハ東京人ナリ…新聞ノ東京ヨリ來タル、昨日發行スル者本日亭午ニ達ス、時トシテ晩ニ及ブコト有り、蓋シ新聞ノ盛ニ浴場ニ行ハル、ニ至リシハ即チ文志ノ力ナリ」<sup>10)</sup>とあり、辺鄙な町でも前日発行の東京の新聞が読めることを指摘、その縦覧所を起こした小林文志の貢献を絶賛している。あるいは明治12年の「濱松風」には、「漁史静岡ニ來タラザル久シ市街ノ景況往日ニ比スレバ頗ル凋衰シタル如シ唯近來開業セシ函右日報ノ追々盛旺ナルハ感服ノ至リ」と、最近寂れた静岡に新聞ができたことを唯一のよいこととして取り上げ

ている。<sup>11)</sup>

反対に、新聞のないところを訪れた際には、あたかもその住民が違う場所に生きているだけではなく、違う時間に生きているように描いている。たとえば、明治16年の熱海紀行文である「すげのを笠」には、「新聞紙ノ如キハ讀ム人罕ナリ之レハ敢テ咎ムルニ足ラズ浴客ニモ讀ム人多シトハ言ヒ難ケレバナリ亦是レ小桃源カ將タ未開國カ」<sup>12)</sup>とある。その前年、熱海を訪れた時も、福浦という海辺の町の住民について、「婦女兒童都人ヲ視テ怪ムノ状有リ」と書いて、この町を「亦小桃源ナルカ」と評している。<sup>13)</sup>

この表現は、もちろん陶淵明の「桃花源記」を典拠としている。晋の時代に武陵の漁師が川をその源まで溯り、兩岸に生えている桃の林の尽きたところに山があり、その穴の向こう側に理想郷があることを発見する話だが、ここでもっとも重要なところは、漁師がその住民に時間について問いを発したところである。「問ふ、「今は是れ何の世ぞ。」と。乃ち漢有るを知らず、魏・晋に論無し」<sup>14)</sup>とある。つまり、柳北が熱海周辺の町を「小桃源」と表現することによって強調しているのは、牧歌的なユートピアという従来のイメージではなく、その住民は同時性を共有しない、違う時間に生きているということである。

ここでは詳しく述べないが、テッサ・モーリス＝鈴木氏の『辺境から眺める』では、日本の近代化を分析するのに、示唆に富む洞察が繰り返し広げられている。それは、まず日本の近代化の過程において、中国由来の中華思想・華夷世界観は、文明論・進歩史観に切り替えられたが、その変化を、空間的な配置が時間的な配置に置き替えられたというふうにかえることができるというものである。柳北の15年間にも及ぶ国内紀行文を見て、そのテキストにおける他者に対する視点の変遷を考察すると、そのような空間から時間への変化が見られる。つまり、柳北の初期国内紀行文においては、他所へ行った時にその風習の違いなどを指摘し、中心から遠い故に空間的な隔たりを強調したが、外遊後には新しい視点が登場するようになった。それは他者の自分との違いを時間的にも捉えるようになり、それをその進歩の度合い、開明のレベルという風に表現するようになった

たと考えられる。

進歩に対するこの新しい注目は、初期紀行文を新聞や雑誌に発表する場合にも見られる。それは、その数年前に書いた紀行文の文中に新たにコメントを挿入し、過去と現在の違いをはっきりさせることによって、読者と共有する同時性を強調するところである。たとえば、明治2年の岡山への旅を記録する「航薇日記」を見ると、横浜から米国汽船オレゴニアンに乗って神戸へ行った柳北は、その汽船の速さに感銘を受け、出発後最初に詠んだ絶句に次の2句がある。

風怒海門霜氣澄 風怒り 海門 霜氣 澄む  
汽船萬里去如鵬 汽船 万里 去ること鵬の如し

しかし、ちょうど10年後にこの初期紀行文を『花月新誌』に掲載した際には、柳北はこのくだりのあとに、「此日記書きし比は、神戸の汽船開けて後幾程にもならぬ故、珍しく思ひて詩歌をも作れるなり、今日の事情とは大に異なる所あれば、總て其心して看給ふ可し」と、わざわざことわっている。つまりここで強調しようとしているのは、現在の汽船に慣れている自分と、昔の汽船の速さを珍しがっていた自分との時間的な隔たりであり、作者が読者と時間を共有しているということである。<sup>15)</sup>

柳北の紀行文は、このように同時性を強調するようになったことと関連して、徐々に数字的精密さを帯びるようになっていく。たとえば明治11年の夏に柳北が箱根へ行った時の紀行文「澡泉紀遊」を見てみると、東京からの出発が次のように描かれている。

九月二日午前六時ヲ以テ發ス…是日天陰ル、寒暑針七十八度、曇氣爽涼頗ル體ニ可ナリ、七時新橋ノ汽車ニ駕シ金川ニ到ル…十一時五十分藤澤驛堀川亭ニ投ジ午飯ス…五時小田原ニ達ス金川ヨリ小田原ニ至ル迄歩挽車ノ價八十五錢（眞誠社同盟ノ定價ナリ）、其ノ迅速ナルヲ以テ更ニ車夫ニ若干錢ヲ

ここでは、その日の気温や汽車の発着時間が細かく記録されているが、当時の時間に対する変わりつつあった考え方は、このくだりの最後に出てくる車夫への配慮にも現れている。そこには、車夫が普段よりも早く目的地まで車を走らせたので柳北は、チップをはずんだとある。もちろん車夫に謝礼を渡す習慣は従来からあったのだが、これほど時刻を強調している文脈においては、その配慮の根拠がいっそう明らかに見える。まさに「時は金なり」ということだが、柳北自身がこの近代を定義する格言をしみじみと感じ始めていたことが、紀行文から読み取れる。

更に柳北は、職業である文筆活動を一種の労働として再認識するようになり、そのことをはっきりと紀行文に反映させた。柳北の国内旅行をする目的、少なくともその紀行文の序などに自分の目的として設定する理由は、時が経つに連れてかなり変化していく。最も古い旅を著した「航薇日記」では、旅行の動機は次のように述べられている。

さらでだに京阪に一遊せんと思ふ折なれば、例の烟霞痼の動き出で、遏め  
がたければ、萬の事皆擲ちて旅の装ひをなす事とはなりぬ<sup>17)</sup>

つまり旅の動機は単に、自分の他所に対する好奇心と景勝を鑑賞したいという願望を満たすことにありとし、旅に出る機会がたまたま訪れた場合すぐさま行こうと決心すると述べている。

ここで「烟霞痼」という言葉を使っているところには、旅を一種の療法として捉える視点が見られる。その後、新聞人になってからの紀行文にも同じような書き方が見られるが、いささか違う意味合いを帯びるようになる。つまり旅行をすること自体がはっきりと柳北の職務内容の一部と位置づけられるようになり、「遊記」を書くことが義務の一つと捉えられていく。たとえば、明治15年

に熱海を2週間足らず旅した柳北は、「なくもがな」という題の紀行文を書いたが、その冒頭部分で、今まで見られなかった旅行動機を指摘する。

漁史山水ヲ好ムガ故年々四方ニ遊ブ遊ブ毎ニ必ズ記アリーハ以テ自ラ忘レヌ爲メニシーハ以テ雜録欄内ノ填草ト爲ス其ノ巧拙ノ如キハ自ラ問ハズ人モ亦之ヲ問ハザランコトヲ願ヘリ近年烟霞ノ癩ト河魚ノ疾トノ爲メニ一年二回必ズ温泉場ニ赴ク暑ヲ避クルハ函嶺或ハ香山ニ於テシ寒ヲ避ルハ熱海ニ於テス是レ漁史自家ノ年中行事ナリ<sup>18)</sup>

柳北は、旅行をすることが自分の「年中行事」でもあり、例の「烟霞ノ癩」や身体的な病を癒すためでもあるが、「雜録欄内ノ填草ト爲ス」<sup>19)</sup>というところが示すように、その旅行の産物とでもいえる遊記は重要な収穫だとしている。

翌年の熱海旅行を著した「藥槽餘滴」では、「春ニ秋ニ漁史ハ必ズ温泉場ニ遊ブ遊ベバ必ズ記アリ是レ漁史自カラガ書キタガルニ非ズ書カネバ成ラヌ義務有ルニ因レリ」とあり、紀行文を書くことが「義務」としてはっきりと定義されている。<sup>20)</sup>

柳北は、初期紀行文においては、文筆活動及びその成果である作品を、あまり価値のないものとして軽視するポーズを取ってみせた。たとえば、明治10年に京都を訪れた際、著名な陶工だった清水六兵衛きよみづ ろくべえ（三代 1820年～83年）に会いに行ったことが遊記「客中漫録」に出てくる。全国いたるところに六兵衛の作品が霽がれているのに、窯が非常に狭いことに驚いた柳北は、その理由を尋ねる。六兵衛は、京都の店で売っている「六兵衛の作品」といわれるもののほとんどは、別人が作った偽物だと答える。それを聞いた柳北は、偽物がたくさん出回っているほどの名人六兵衛と違い、「夫レ操觚執簡ノ士日夜文墨ニ従事スル者自ラ以テ得意ノ状態アルモ誰カ能ク其ノ文ヲ擬シ其名ヲ假ルニ至ラン自家ノ文章既ニ半文銭ニ値ラズ況ヤ擬作ヲヤ況ヤ擬名ヲヤ」と、文筆活動に携わる者の作品について自嘲的に述べている。<sup>21)</sup>あるいは、明治12年の「濱松風」にも

偽物の書画を売っている店を訪れ、自分自身の書とされている作品を目にする  
が、「擬造ノ廻カニ眞蹟ヨリ美ナルコソ可笑シケレ」とある。<sup>22)</sup>

ところが、時が経つにつれ、旅先での文筆活動を職業として認識するとともに、その作品を少しずつ商品として位置づけるようになっていった。明治13年に東京の詩人鈴木松塘が自らの潤筆レートを定め公開したが、柳北はその新しい方法を絶賛した「潤筆條例」というエッセイを『朝野新聞』に発表している。そこで「全世界ノ中物トシテ價有ラザル無シ…貴重ナル光陰ヲ費ヤサシメ而シテ其報謝ヲ怠ル無禮亦甚シ不理亦甚シ」と書いた。<sup>23)</sup>

同じような考えは、紀行文のなかにも現れた。従来の紀行文にはよくあるのだが、旅先で泊まる宿の主人などに掛け軸の揮毫を頼まれることがあり、それはむしろ文人の歓迎すべき活動として描かれていた。ところが、後の紀行文になるほど、それを不満げに記すようになった。たとえば『熱海文藪』の最後に載っている紀行文「藥槽餘滴」には、熱海の宿の主人が、宿泊中の医者に病気を無料で診てもらおうとすることを非難する。しかしそのようなことは、医者に対してだけではなく、文筆活動をする自分に対してもふさわしくないことを指摘し、「人ノ技藝ニ價有ルヲ知ラズ時間ニ價アルヲ知ラズ筆墨ニ價アルヲ知ラザルカ」と書いている。<sup>24)</sup>

紀行文にこのようなことをあえて書いているという事実は、紀行文をそのように書くことによってその効果が期待されたということを物語っている。つまり、新聞に掲載され、自分が書くのとほぼ同時に読まれることが前提になれば、紀行文は旅行者の経験及び旅先の風物の単なる個人的な記録に止まらず、それが現実に影響を与える可能性も孕んでくることが考慮されてゆくということである。

また柳北もそれを期待したと思われる。たとえば、明治14年伊香保へ行った時の紀行文「あたまの洗濯」では、柳北は連日の雨のため、郵便も届かなくなることを嘆き、この律詩を詠んだ。

斜陽收影澗橋西	しゃよう　かげ　おさ　かんきよう　にし 斜陽　影を收む　澗橋の西
栗葉撲衣秋氣凄	りつよう　い　う　しゅうき　すご 栗葉　衣を撲ちて　秋氣　凄し
雲去雲來山出沒	くも　さ　くも　き　やま　しゅつぼつ 雲去り　雲來たりて　山　出沒し
峯前峰後日高低	ほうぜん　ほう　ご　ひ　こうてい 峯前　峰後　日　高低す
縱然風景可娛目	たとへ　ふうけい　め　たの　べ 縱然　風景　目に娛しむ可きも
其奈村醪難到臍	そ　そんろう　ほぞ　いた　がた　いかに 其れ　村醪の臍に到り難きを奈せん
誰寄家書慰幽獨	たれ　か　しよ　よ　ゆうどく　なぐさ 誰か　家書を寄せて　幽独を慰めん
斷鴻聲裏夢魂迷	だんこうせいり　む　こん　まよ　25) 斷鴻声裏　夢魂　迷ふ

この律詩の最後の2句は「家のものの誰かが手紙を送り私の孤独を慰めてほしい。群れから離れて飛んでいる一羽の雁の泣き声を聞きつつ、(便りを届けてくれることを願い)、夢の中で魂が故郷へとさまよう」という意味である。

もちろんこの詩は、柳北の旅行の心境を表しているのだが、紀行文の記述の部分にある伊香保の郵便配達の頼りなさを嘆くこれとは別の箇所と一緒に読むと、これは、すこし違う意味合いを帯びてくる。実はその3年後、「洗愁日乗」という紀行文のなかで、熱海を旅行中の柳北はかつての伊香保の郵便配達にまつわる経験と紀行文での発言に言及した。

漁史過日伊香保ニ在リテ其地ノ郵便三日ヲ經サレハ東京ニ達セサルヲ嘆シ一言ヲ新聞紙ニ掲ケタルニ其爲メニハ非ス全ク暑天ニ近ツキ官員諸君ノ遊浴多キ故ニ改良有リシナランカ俄ニ郵便ハ發スルノ翌日東京ニ達スルコトナリ人々皆喜ヘリ<sup>26)</sup>

この文章の表面では柳北はあくまでも韜晦したポーズをとり、新聞人である自分と官僚との違いを強調しようとした。しかし、その裏で、自分の言動が及ぼした効果をほのめかしていたと言える。<sup>27)</sup> 更にほかの紀行文では、その手段性がより明らかになり、その文章が社会に対する働きかけとして機能する場合

も出てきた。例えば、旅先で出会った事業家、地方の知事、明治政府の高官などのことを紹介し、彼らの地域への貢献を褒めたりもした。

例えば、明治15年の「烟草の吸さし」には、柳北が熱海の道でたまたま「天下の糸平」こと田中平八（1834～84）という事業家に会ったことが記されているが、出会いを記録することをきっかけに、この篤志家の慈善行為を詳しく紹介する。糸平は、熱海に電信局がなくて困っていたが、小田原から熱海に電信線を引くお金を調達し、それを政府に寄付した。そのほかにも、糸平は、熱海の用水が悪いため、新しい水道を作るための工事費を自分で用意し、無金利借金という形で官に貸したことが述べられている。（「烟草の吸さし」1月29日の項）<sup>28)</sup> 同じ遊記に、一週間後に糸平のことがまた出てくるが、そのときかれが温泉寺に石碑を再建するための寄付を提供したという「美事」が書かれている。<sup>29)</sup>

柳北の紀行文のなかでは、一般市民だけではなく、時々公務員も絶賛の対象となる。同年に書いた「すげのを笠」にも、当時元老院議長だった佐野常民（1823～1902）のことが次のように紹介されている。

散歩シテ木ノ宮ニ遊ブ此地ハ雜卉蔓草路ヲ擁シ遊憩ス可キ處モ無カリシニ  
本年ハ大ニ榛莽ヲ除シ處々ニ小榻ヲ安ジ納涼ニ便ナリ聞ク佐野元老院議長熱  
海養病中若干圓ノ金ヲ抛チ其ノ費ヲ助ケラレシト市街ヲ一巡スルニ電信局モ  
既ニ落成シ飲料水ヲ通ズル工事モ日ニ功ヲ促シ道路ノ修築モ亦着手ス速晚一  
大繁華ノ地トナルニ至ルハ今ヨリ期シテ待ツ可シ<sup>30)</sup>

このほかにも明治14年の「藥槽餘滴」には静岡の初代知事で道路を改良するのに尽力した大迫貞清のこと、それから恵まれない人のために慈善活動をした公務員だった近藤軌四郎のことが紹介されている。

今まで見てきたように、紀行文を新聞で発表することが執筆の前提となったことは、表記や文体を始め、その内容にもさまざまな影響を与えたと言えよう。柳北の外遊を境に見られる時間観念の変化と並んで、その作品に表れる、或い

はその作品によって築かれた同時性は、紀行文に新しい効果をもたらした。なかでも執筆者が新聞読者と時間を共有することは、新聞に掲載された紀行文というジャンルに読者ひいては社会に働きかける機能を導入させ、その質を変えさせることとなった。

維新後、柳北は「草莽ノ野人」になったとはいえ、その紀行文においては、こうした新聞掲載ならではの機能を生かし、自分なりに当時の日本の現在と未来に積極的に携わろうとしていたことが分かるのである。

#### 【註】

- 1) たとえば柳北の生前、熱海関係の紀行文は、明治17年7月に『熱海文藪』として出版されており、没後の明治25年に博文館から出版された『柳北遺稿』の上巻にもこれら紀行文の作品のいくつかが一緒にまとめられている。そして五年後に出た『柳北全集』では「紀行」という項をたて、熱海やその他の地方の紀行文を数件集めている。従ってひとつのジャンルを成していることは明らかだと思う。
- 2) たとえば「航薇日記」10月19日の項では、柳北は「名に高き淡路しま山来て見れば昔なからの千鳥なくなり」と詠んでいるが、これは言うまでもなく『百人一首』にも採られている源兼昌の「淡路島かよう千鳥の鳴くこえに幾代ねざめぬ須磨の関守」という歌を踏まえている。漢詩の例も同じ「航薇日記」に見られる。11月1日に源平合戦で有名な藤戸を訪れた柳北は、そこにある先陣庵は、「菅茶山集中に於て見たることありし」と記している。
- 3) 「常總遊記」3月22日の項。
- 4) 「下館遊記」12月8日の項。
- 5) 前田愛「柳北「航西日乗」の原型」『近代日本の文学空間—歴史・ことば・状況』所収 新曜社 1983年
- 6) 齋藤希史「明治の遊記—漢文脈のありか」『明治文学の雅と俗』所収 岩波書店 2001年
- 7) たとえば明治14年の「鴉のゆあみ」に、熱海のお湯のおかげで長患いからすっかり回復して元気で東京に戻ろうとする立春の朝に「天明ヶ群鴉唾々トシテ啼ク乃チ戯レニ俳句ヲ綴リ以テ此遊記ノ筆ヲ絶ツ 長閑さや鴉も磯にゆあみして」と書いて筆を擱く。あるいは2年後の「烟草の吸さし」にも「漁史俳句ヲ識ラザレド戯レニ口ズサミテ竟ニ三物トナリヌ 十州を我もの顔の酒宴かな 墨上」(後二句略)とある。
- 8) たとえば「すげのを笠」の8月26日の項にあるように、塔之沢の玉の湯という宿に一服すると、「矮陋極マリタル」部屋に案内されたが、その不潔さに閉口した柳北は、宿の名称をもじって、「玉の湯にたまたま来しがたまりかねたまげて漁史ハ歸りたまひぬ」という狂歌を詠んだ。
- 9) 「客中漫録」『柳北遺稿上』100-101頁。明治13年2月3日の『朝野新聞』に発表されたエッセイ「昨猫今虎」にも同じ比較がなされている。
- 10) 「澡泉紀遊」『柳北全集』160頁
- 11) 『柳北遺稿上』130頁
- 12) その前に「嗚呼眞ノ温泉場ナル哉ノ嘆ヲ發セシム是レ熱海箱根ノ及バザル所ニシテ又伊香保ノ娼樓ノ如キ雜沓トハ廻カニ異ナリトス若シ漸次ニ改良シテ其ノ短ヲ去リ其ノ長ヲ用ヒバ此地ノ繁華豈今日ニ止マランヤ漁史之ヲ本地ノ有力者ニ望マザルヲ得ズ聞ク茲ニ遊ブ人多ク三四月ニ來タル否ラ

ザレバ九月上旬ヨリ十月下旬迄ニ在リト春暖ノ侯ニハ浴樓充填シ菊屋ノ如キハ房數四十餘有レド一房ノ空シキ無キニ至ルト亦盛ナリト謂フ可シ此地ニハ寄席一軒有レド目下ハ休業ス大弓楊弓和流ノ玉轉ガシ等ノ諸肆有リ」とある。『明治文學全集4』63頁

- 13) 「なくもがな」明治15年1月13日の項、『明治文學全集4』所収53頁
- 14) 原文は「問今は何世、乃不知有漢、無論魏、晉」とある。
- 15) 数年後、もう一つの文明の利器である汽車で旅するようになった時、柳北は同じように現在と「舊天地」のずれを強調する姿勢を取った。明治17年の夏、柳北は娘二人と一緒に伊香保を目指して出発するが、上野から高崎までは汽車で行く。「舊天地ナラハ早くシテ三日程ナリ此山ニ即日ニ達スルヲ得ル汽車ノ功用寔ニ大ナリト謂フ可シ如何ニ恐ロシキ守舊家ノ隊長モ此等ノ事ニ至リテハ顧ミテ他ニ言フヤ必セリ」(「四日の菖蒲」6月22日の項『柳北遺稿上』所収193頁)「顧ミテ他ニ言フ」は、孟子に諫められてしまった梁惠王が黙って横を見て話題を変えようとした故事に拠る語。
- 16) 「澡泉紀遊」『柳北全集』158-59頁。引用箇所続きでは、「更ニ車ヲ命ジテ函根ニ入ル、新築ノ線路坦々、復タ往時ノ行路難ヲ賦スル者無キ也」とあり、「往時」と現在の相違を強調する。また同じ遊記の九月六日の項などには「時辰器ヲ検スレバ四時二十分ナリ」という風に、時刻を明記するところが散見される。
- 17) この設定は、「航西日乗」の冒頭部分に似ている。そこでは、柳北は東本願寺の現如上人にヨーロッパへ行くかと誘われ、家族にも友人にも黙って、ある日突然出発するという有名なポーズをとって見せた。「此行故有リテ家内并ニ親戚朋友ニモ告ゲズシテ立出ヌレバ送ル人トテハ無シ唯ダ發途ノ際簀作秋坪翁ヲ訪ヒ竊ニ其ノ事ヲ告ゲテ去ル」とある。『明治文學全集4』117頁。
- 18) 冒頭は次のように続く。「夫レ怪奇絶絶ノ境ト雖ドモ遊ンデ之ヲ記シ再ニ及ビ三ニ及ベバ竟ニ重複ハ贅ヲ免レズ況ヤ尋常ノ温泉場ヲヤ熱海這回ノ行素ヨリ記スベキノ事無キヲ知ル然レドモ社員ハ漁史ガ數旬間ヲ疎懶ニ過サンコトヲ慮リ例ニ違フテ客中ノ日乗ヲ郵寄セヨト言ヘリ漁史既ニ之ヲ書クハ書カザルニ如カザルヲ知ル然レドモ肯カザレバ疎懶ノ譏リヲ免レズ乃チ其ノ概略ヲ摘記シテ以テ郵筒ニ附ス漁史自カラモ此ノ遊記ハなくもがなト思ヘリ他人ニ在テハ定メテ讀ムヲ厭ハル、ナル可シ」「なくもがな」『明治文學全集4』52頁
- 19) 後年の「藥槽餘滴」にも、同じ表現がある「連日西風強ク吹キ其故カ寒威モ自カラ嚴ナリ是レ失望ノ一ナリ…斯ク非常ニ浴客多キ是レ失望ノ二ナリ此ノ二項ノ失望ハ有レド靈藥滿槽以テ沈痾ヲ療シ得バ復タ他事ニ向テ小言ヲ云フニ及バズ且ツ餘滴以テ新聞上ノ填草ト爲シ得バ是亦幸甚」「藥槽餘滴」『明治文學全集4』67頁
- 20) 文はこう続く「去レド此回ハ平常ト異ナリ漁史ハ十二月十三日ヨリ廿七日ノ夜迄ハ墨水ノ草廬ニ困臥シテ二豎ノ爲メニ悩マサレテ在リシヲ治療ノ爲メニト意ヲ決シテ急ニ熱海温暖ノ地ニ赴クコトハナリタリ然ル故此回ハ記ス可キ事モ無カルベク又記サネバ成ラヌト謂フコトモ無ク又記スルコト有ルモ懶クテ止ムコトアレシ」『明治文學全集4』67頁
- 21) 「客中漫録」『柳北遺稿上』109-10頁
- 22) 「此ノ他猶驚ク可キ事一有リ是レ何物ゾ曰ク贋書畫ノ流行ナリ驛内到處贋書畫ナラザルナシ各旅亭ノ若キ皆若干金ヲ出シテ贋ヲ買フ山陽東湖南洲ノ類世間ニ贋多キ者ハ論無シ三洲海舟青湖某々々々皆贋ヲ造テ賣買ス而シテ其ノ贋タル一目瞭然トコロニ非ズ本人ノ書ヲ全ク觀ヌ人ガ書キタルト思ハル、者多シ最モ驚ク可キハ何人ノ惡戯ナルヤ漁史ノ若キ惡筆ヲ擬シタル者ヲ一市廛ニ觀ル擬造ノ週カニ眞蹟ヨリ美ナルコソ可笑シケレ」「濱松風」『柳北遺稿上』127-128頁
- 23) 「全世界ノ中物トシテ價有ラザル無シ一塊ノ土一拳ノ石モ皆其ノ價ヲ有セリ況ヤ其レヨリ貴重物ニ於テヲヤ夫レ人ノ貴重ナル心思ヲ勞セシメ貴重ナル氣力ヲ疲ラシメ貴重ナル光陰ヲ費ヤサシメ而シテ其報謝ヲ怠ル無禮亦甚シ不理亦甚シ善イ哉松塘鱸君ノ新二潤筆條例ヲ造リ之ヲ江湖ニ播クヤ」

- 『柳北遺稿下』26頁。初出は『朝野新聞』明治13年1月15日号
- 24) 「獨り醫家ノ一途ノミナラズ文士墨客ニ揮毫ヲ乞フモ亦同轍ニテ此地ニ來タレバ唯ダ書カセルモノ、如ク思フ何ゾ其レ横着ナルヤ人ノ技藝ニ價有ルヲ知ラズ時間ニ價アルヲ知ラズ筆墨ニ價アルヲ知ラザルカ漁史ハ全ク之ヲ知ラザル人ノミナリトハ思ハザルナリ而シテ彼等ハ必ズ言ハン此地ニテハ參議様デモ願ヒサヘスレバ額デモ掛物デモ唯ダ書イテ下サル餘人ハ無論ナリト嗚呼參議様ナドコノお慰ミニ書イテ下サル、ナラン文士墨客ニ於テハ豈お慰ミニ書クノ暇有ランヤ豈お慰ミニ書ク心有ランヤ人ノ爲メニ頼マレテ書クハ随分迷惑ナルコトナリ然ルニ一文錢ヲ費ヤサズシテ幾十室ノ扁額ヤ數十房ノ懸物ヲ造リ出ス誠ニ以テ自分勝手都合善キ商法ナリ」『明治文學全集4』80頁
- 25) 記述の文には「連雨ニテ烏川渡ヲ絶チ郵書新聞皆來ラズ、此夜枕上一律ヲ得タリ」とある。『柳北全集』204頁
- 26) 『柳北遺稿上』220頁
- 27) 自分を高官と対蹠的に描くパターンは、柳北、(特にその初期)の紀行文によく見られる。たとえば明治12年の「濯纓日記」には、「乃チ總國分寺ニ過グ、顯官紳士大佛殿ノ寄進ニ附キタル者多シ、友人安藤願事杯モ亦御奮發アリ、漁史モ九百牛ノ一毛程ヲ奉納ス蓋シ後生ヲ祈ルデモ何デモ無シ漁史往年江湖ニ淹落セシ比ハ殆ド住ム可キ家モ無ク、此ノ大佛ト一様ナリシ故同病相憐ムノ感ヲ起シタル故ナリ」とある『柳北全集』178頁。しかしこの紀行文も自己憐憫に止まらず、その直後に柳北が鶴岡八幡宮に行つて、源頼朝の墓を参拝することが述べられているが、そこでは読者に伝統文化を守るように働きかける。「嗚呼右大將ハ我邦中古ノ一大英傑」なのに、「古墳ハ枯木墜葉ノ間ニ在リ來リ掃フ者殆ド罕ナル」ことを嘆き、その有様は「以テ我が邦人ノ肛門甚ダ狭キヲ知ルニ足レリ」とする。
- 28) 「東京ハ勿論西京大阪各地ノ電信日夜往復三四十回ニ及ブ而シテ此地ニ電線無シ不便極マリテ費用夥シ我レ甚ダ困ル獨リ我レノ困ルノミナラズ大臣參議モ困リ給ハン柳北先生ノ如キモ亦時トシテ困ルコトアラン小田原ヨリ此ニ電線ヲ引ク其ノ價ハ數千金ニシテ辨ズルニ足りナン我レ官ニ乞ヒ私金ヲ以テ之レヲ造ラント思フハイカニト漁史大ニ之ヲ賛成セリ嗚呼東京横濱ニ其ノ豪富氏ノ右ニ出ヅル者固ヨリ多シ然レドモ氏ハ實ニ奇男子ニシテ尋常一般ノ守錢奴ト大ニ異ナル所有ルナリ聞ク氏ハ此回熱海ノ用水悪シク人身ニ害有ルヲ以テ新タニ水道ヲ鑿チ山中ヨリ十五町餘市街ヘ上水ヲ引ク爲メニ自カラ其ノ費一千五百圓ヲ損テ、此ノ工事ヲ興サシメシト且ツ氏ノ曰ク我レ金ヲ與フルト云ハバ此ノ地ノ人必ズ受ケ難カラシ之レヲ貸ストセバ我が死後ニ兒輩或ハ其ノ金ノ返償ヲ促ガスコト無キヲ保タズ宜ク五十年無利足ノ貸金ト爲シ置ク可シ是レ兩全ノ計ナリト土人皆深ク其ノ高誼ヲ感戴セリト夫レ此ノ地ノ水道既ニ氏ノ力ニ成リ電線亦氏ノ手ニ成ル有ラバ天下ノ糸平ノ名亦永ク此ノ地ニ朽チザル可シ漁史爲メニ一大白ヲ舉ゲテ氏ガ其ノ志ヲ遂グルニ至ルヲ祝セントス」『明治文學全集4』所収58頁
- 29) 2月6日の項に「糸平氏ト共ニ温泉寺ニ詣デ哲門和尚ニ面シ斷碑再建ノ事ヲ謀ル糸平氏贊ヲ捐テ、此事ヲ成サントス亦美事ト云フ可シ」とある。
- 30) 「すげのを笠」9月3日の項『明治文學全集4』所収65頁

#### \* 討議要旨

関礼子氏は、成島柳北の独自性として「時間観念」が指摘されていたが、発表タイトルにある「国際人」という表現と、本発表内容とはどのように関連するのか、と尋ね、発表者は、柳北が新しいまなごしを獲得した理由を海外体験にすべて帰することはできないが、空間から「時間」に対する意識変化に関しては欧州視察の随行体験がかなり影響していると思われる、と答えた。

谷川恵一氏は、①「時間の同時性」は新聞というメディアの機能が作り出したものと捉えられるのか、あるいは柳北の記事にとりわけ著しいといえるのか、②柳北の文章には雑多な内容が少なくない

が、引用した資料を「紀行文」というジャンルで括ることは妥当性を持つのか、と尋ね、発表者は、①柳北に顕著であると思われ、たとえば紀行文中にも「次号に譲ります」などと、執筆する現在を意識し強調した記述が見られる、②「柳北全集」の目次の中で、紀行文という項目に分類されている、と回答した。